

第十話 ベンジャミンの木

家に戻った『マナ』は、窓から先ほどの丘の方を見た。ふと窓越しに見える太い蔦のような根っ子が、『のら』の鈴の蔦に似ているなど『マナ』は思った。実は『マナ』の家には、蔦のような大きな木が巻きついているのである。『マナ』がこの家に引越してきた時、すでに家の周りにはこの木が巻きついていた。聞いたところによると、前に住んでいた人が植えた木が、何時の間にか家を取り囲むように大きくなってしまったとのことであった。この家は以前貸家であったが、蔦が巻きついてしまい困った大家さんが、売りに出したものであった。それを『マナ』が購入したのである。『マナ』はこの木に巻きつかれた家を不思議と気に入っていた。それは懐かしいような不思議な感覚であった。ただこの木の根元には大きな傷があった。それは一体誰がつけたのであろうか、『のら』が付けたとも思えず不思議に思えた。

「この木は『のら』が植えたの」。傍らの『のら』が「うーん、たしか、昔旅の途中で拾ったような気がするけど、よく覚えていない」と答えた。『マナ』はどこでこの木を『のら』が手に入れたか気になったが、記憶を無くした『のら』にこれ以上聞いてもと思っただ。『マナ』は窓越しに外を見ながら、『のら』に向かって「この木を大切にしようね」と言った。『のら』はニコッと笑い返した。窓の外では心地良い風が木の葉を揺らしていた。

その後『マナ』はこの木が『ベンジャミン』の木であることを知った。二人はこのベンジャミンの木を、何時頃からか『ベンちゃん』と呼ぶようになっていた。こうしてベンジャミンの木に囲まれた家での、二人の奇妙な共同生活が始まったのである。

